○再びムサシアブミの畸形について（前川文夫）　Fumio MAEKAWA: Settled abnormality in *Arisaema ringens*.

ムサシアブミの花穗に佛焰苞と花序附屬物との丁度中間的な白い肉質の鞘ができる畸形が年と共に形質として固定する例について，昨年の本誌7月號（**26**: 208）に形質發現の進行性の一つとして報じておいた。昨年迄の觀察では榮養が特に過剩であるために起つたかの懸念があつたので，昨年夏に今度はロームの貧榮養のところへ全部移植してしまい，その經過をみていたところ，本年も株分れの結果，花序をつけたものが澤山にでて來た。面白いことに大體昨年と同樣に完全な畸形の筒のものを多く生じたし，又この附屬物がはじめて出現した頃の狀態と似た不完全な突起のものも生じた。全然でなかつたものもある。花序內の花の雌雄にも種々の程度があつて，表でもわかるようにそれらの性の分化と附屬物の出現とには相關關係が高い。即ち一般に雄性である時は附屬物を生ぜず，雌性を混えるにつれて不完全な突起として出現し，完全な雌穗では完全な筒狀の附屬物が形成されることが多い。

表1. ムサシアブミの附屬物の出現と性との關連の表

穗の性別	附屬物完筒	附屬物不完全	附屬物なし
♀	(6)　5	(1)	2
♂		4	(1)
♁		1	(5)　6
計	11	6	14

（ ）あるものは昨年（1951）の株數，ないものはの本年（1952）の株數。

これで畸形が榮養狀態によるのではなく，大體形質として固定していること，しかもそれが雌性の穗と深く關連していることがわかる。

因にテンナンショウ類は從來性の轉換の例として有名であるが，これは眞の意味の性の轉換ではなく，解釋がまちがつていると思われる。テンナンショウに限らず2nの植物體は本來は雌雄があるべきではないのである。そうした無性的な株上に，ある年は雄花をつけ，ある年は雌性の花を開くがそれが榮養に左右されるというだけのことである。一方に決定しているものが他方に轉換するのではなく，いずれとも決しない，いいかえればいずれにもなりうる能力のあるものがまだそのどちらにも決つていない時に，何かの起因でいずれかの性に決まるのである。この二つの事實の本質的な相違は把握されなければならないと思う。